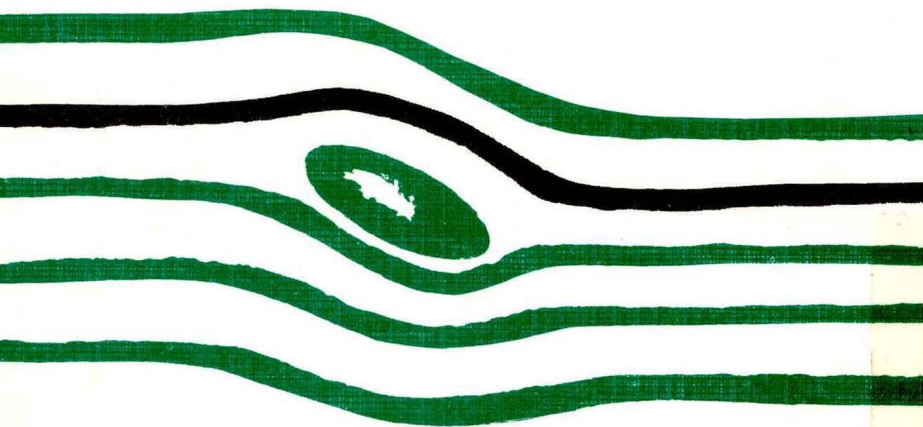


「源氏物語」を読む

梅光女学院大学公開講座
論集 第25集

佐藤泰正編

笠間選書 160



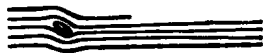
「源氏物語」を読む

梅光女学院大学公開講座

論集 第 25 集

佐藤泰正編

笠間選書 160



笠間書院

■執筆者紹介

目加田 さくを	教授・文博
今 井 源 衛	教授・文博
伊 原 昭	教授・文博
森 田 兼 吉	教授
田 坂 憲 二	福岡女子大学助教授
武 原 弘	教授
岩 崎 禮太郎	教授
井 上 英 明	明星大学教授
林 水 福	輔仁大学助教授兼日文史主任

笠間選書160 「源氏物語」を読む

1989年9月5日 初版第1刷発行

1991年10月30日 初版第2刷発行

定価 1,030円 (本体 1,000円)

編 者 佐藤泰正◎

発行者 池田つや子

印 刷 科学図書印刷

製 本 笠間製本所

発行所 有限会社笠間書院

〒101 東京都千代田区猿樂町2-2-5

電話 03-3295-1331 (代) 振替東京1-56002

書籍コード 1391-953160-0924

目次

源氏物語の人間	目加田さくを	1
「もののまぎれ」の内容	今井源衛	25
『源氏物語』における色のモチーフ——“末摘花”の場合——	伊原 昭	45
光源氏はなぜ絵日記を書いたか——須磨・明石から絵合へ——	森田兼吉	67
弘徽殿太后試論——源氏物語における政治の季節——	田坂憲二	87
末期の眼——紫上における死と救済の問題——	武原 弘	109
源氏物語をふまえた和歌 ——千五百番歌合における定家と公経の歌を中心として——	岩崎禮太郎	127
光源氏の生いたちについて——古代英雄神の視点から——	井上英明	147
『源氏物語』の中国語訳をめぐる諸問題——桐壺の巻を中心にして——	林 水福	167
〈読む〉ということ——あとがきに代えて——	佐藤泰正	187

目加田さくを

源氏物語の人間

野原を歩いていて、珍しく島寒菊のきいろい花群に気づく。一株引きぬいて持ち帰りたいものと、手をかければ、なか／＼抜けない。何年たったか、したたかな株で、四方八方に枝が伸び、中には、地面に這って根を生やし、小株になってるものもある。花も蕾もびっしりついている。明日にも咲くか、ほころびかけのも、まだ／＼かたい蕾も。花卉が散ったのもあり、種子は又どこかに散って又根づいていくことだろう。よくみると、株の根元には小さい芽がいくつもついている。来年伸びて幹になるのだろう。やっと掘りおとして気がついた。一緒に、ネコジャラシ、おおぼこ、姫じおん、茅萱なんどがくっついていた。

これが、いうなれば、宇宙の生態系というものである。紫式部は、そう認識し、人間も宇宙のごく一隅に、ほんの一時すむ一生物とみている。したがって、彼女が創造した源氏物語世界も、この生態

系のままに構築されている、と筆者は思っている。既に述べたように、紫式部は人間を個としてみるのではない。人間を描く場合、たとえば、光源氏の物語であるが、光源氏その人一人にスポットをあてるにとどまらぬ。父桐壺帝、母桐壺更衣がどのような人間であったか、どういう境遇でどのような生涯を送ったか、から説きおこし、源氏がどのような環境で玉光る御子として出生し、どのような幼年期をすごしたか、から語りはじめるのである。彼の生涯を彩る女性群はもとより、二代目の夕霧、明石姫、不倫の子冷泉帝、六條御息所の遺児で養女の秋好中宮、夕顔の遺児で養女の玉鬘が絡らむ。

更に三代目、晩年の彼を屈辱と苦悩に陥れた次男薫（従兄太政大臣の長男柏木と女三宮との不倫の子）を彼の孫匂宮が愛執の淵につき墮とす迄、を語りつくして、漸く光源氏の物語は終る。光源氏の愛執の生、実は愛に執する人間の姿、は、その七十六年間をかけ、源氏一族、かわる藤氏一族、その他多勢をゴッソリと一株引きぬいてはじめて、ほぼ語りつくせる、と紫式部は考えていたようである。

源氏世界に登場する生態系つまり光源氏を光源氏として形成する為の一群の人間を表示しよう（14～19ページ参照）。源氏物語の世紀は、少くとも光源氏出生の前年からはじまり、彼の死後、生存していたならば七十五才にあたる迄、即ち、少くとも七十六年間である。これを筆者は、便宜上、一代目―光源氏・頭中将の時代―、二代目―夕霧・柏木の時代―、三代目―薫・匂宮の時代―の三時期にわけてみることにしている。図示しよう（19～21ページ参照）。

光源氏出生前から死後、孫の時代迄、少くとも76年間にわたって、光源氏を語りつづける。桐壺巻で光君誕生、3才で母更衣死去、5才で祖母の死。葵巻で嫡男夕霧出生、北方葵上死。曙標巻で三月

十六日明石姫出生、秋六條御息所死。薄雲巻で、3才の明石姫袴着、舅太政大臣の死、宿命の愛人藤壺の死。柏木巻で、三代目薫出生、実父柏木の死。御法で紫上の死で前篇は終る。生れる者あれば、死ぬ者あり、である。八年のブランクの間に源氏も出家し、死去。後篇は成人した三代目「匂宮、薫大将」が華やかに登場して恋愛絵巻を展開する。宇宙の時の流れは瞬時もとどまることなく進みつけ、その一時を、人間も又、他の生物と同じように、生れかわり、死にかわり生きつづけるのである。光源氏——（実は人間存在の象徴）——を支える人間の一群はそう宇宙の一時を生きつづける。源氏世界に登場する人物は、それと指示されたもの約三百人、群衆、女房を計算に入れるならば一人に及ぶであろう。何しろ、七十六年間に及ぶ見物衆、女房集団なのであるから。これらが、ごっそり引きぬかれて、光源氏が物語られるのである。当時の平安京の人口は、十万から十五万の間であらうとは歴史家の推定である。方处的にも、京洛の地が中心ではあるが、一巻は舞台が筑紫であり、東国にも言及される。日本を代表すると見なせよう。

さて、源氏物語の作者は、宇宙というものを、無秩序に、勝手気儘に存在するとは考えていないようである。それは彼女の教養に基く世界観、人間観によるのであるが、どうも、それらは、いくつかの原理で律せられているように思っていたらしい。紫式部は彼女が創造した源氏物語世界では、いかなれば造物主であるから、意のままに、創造出来た筈である。源氏物語世界を次のような原理をもって律していたと、筆者は認めるからである。

一 対偶律……易・中国文芸論（対偶）の教養による対偶の思想

二 血統律……人間形成上の資質を規制する……遺伝の思想

三 環境律……人間形成上の方向づけをする……環境の思想

四 因果律……仏教・史記の教養による因果応報の思想

五 偶然律……偶然はやたらと存在しない。一定の範囲内とする思想

対偶の観念は古く紀元前に陰陽二気が働いて宇宙は出来ていると説く易の思想に顕著である。天地、昼と夜、男と女、両眼、左右、両手足等々、対偶はあまねく存在すると。中国では、文芸・汎く文化の重要な要素となっている。対句、対聯等々。すでに六世紀初頭に文心彫竜という文芸論の中で、対偶論を展開しているが、対偶は、宇宙の根元にもとづくものだ和刘勰は論じた。「造化賦形、支体必双、神理為用、事不孤立、夫心生文辞、運裁百慮、高下相須、自然成対」華麗なスタイル四六駢儷体は普く人々のしるところ。それは、日本の知識階層に大きな影響を与えた。げんに、空海は文鏡秘府論に中国対偶論の集大成的見解を示している。

紫式部も又、漢文芸作家の父為時から、史記、白氏文集を教わっている。恐らく他の中国古典にも及んだと推察される。彼女の思想の中に中国流の対偶の観念が深く根づいていたのも自然のなりゆきである。

源氏物語の人物は対偶形成によって、より鮮明に存在を発揮する。光源氏と頭中将、空蟬と軒端萩、紫上と末摘花、夕霧と柏木、薫大将と匂宮、又、藤壺と紫上、源氏と冷泉帝、大君と浮舟、等々。これらは、一方が主で他は引立て役の主副の対もあれば、全く反対の対もある。身代りという対

もあれば、瓜二つという、しかし親子同心円的な対もある。宇治大君と中君というような、ベースは共通であり、性格は全く違う、容貌も一方は父似、他方は母似、しかし、他人からみればよく姉妹似ている、というような対もある。実に複雑多様な対偶の人物形成をしていて、その為に一層、性格、容姿が際立って劇的效果を高めている。注目すべき人物対をあげよう。

光源氏……視覚的超現実的美

薫……嗅覚的超現実的美——生得的

匂……嗅覚的現実的美——人為的

光君と高麗の相人が「めで聞えてつけ奉りけるとぞ言ひ伝へた」という光り輝く美貌といい、薫の通行途次の家々が、彼の香に目覚めるといふ馥郁たる香といい、仏典でとかれる、たとえば、超現実的な仏の三十二相の身金色相、「口氣香潔。如_二優曇羅華_一。身諸毛孔。出_二栴檀香_一。其香普熏。無量世界……」（無量寿經）等からヒントをえた、伝奇的、超現実的美である。その意味で、同じく伝奇的であるが、一方は視覚系美、他方は嗅覚系美と異対である。同じ嗅覚系美でも、一方は生得的超現実的美、他は人為的にたきしめた現実的美であるという異対。源氏物語がノヴェルでありながら、又他方、ロマン、伝奇的といわれる所以である。

構成上、又、主題からも対偶形成、がある。二つの姦通事件をみよう（次ページ参照）。

源氏は女三宮の不倫を知った時、「故院の上も斯く御心には知ろしめしてや、知らず顔を作らせ給ひけむ。思へばその世の事こそは、いと怖ろしくあるまじき過ちなりけれ」と、おもい、「さても怪し

第一の發通

源氏

藤壺

不倫の子

△報果▽須磨……流謫

桐壺帝中宮……出家

冷泉帝……在位中皇子なし

〔桐壺帝はしらずに子として育てる〕

第二の發通

柏木

女三宮

不倫の子

……△報果▽死

准太上皇源氏北方……出家

薫……匂宮に浮舟を犯される

〔源氏は不倫の子と知りながら子として育てる〕

や、我が世と共に怖ろしと思ひし事の報なめり。この世にて斯く思ひかけぬ事にむかはり来ぬれば、後の世の罪も少し軽みなむやと思」したのであった。相似對である。

千年前に、紫式部は人間は、遺伝と環境とによつて大体が形づくられるとみていたようである。血統と環境律の支配をうけているというのである。父母、祖父母等々の血統によつて、容姿、資質、才能、性格等々が承継される。源氏世界では桐壺帝、朱雀帝、源氏、夕霧、明石姫、匂宮へとつづく血の流れ。左大臣（摂政太政大臣）、頭中将（太政大臣）、柏木、紅梅右大臣、玉鬘、へとつづく流れ。

又、右大臣の系流。これにその配偶者の血統が加入される。夕霧は源氏のわかんどおりと母葵上の左大臣家の流れとで、その容姿、資質性格等々が規定される。興味ふかいは、和琴の才が左大臣、男頭中将、孫柏木、曾孫薫へと流れるというのである。薫が、実は柏木の子とはしらない玉鬘が、薫の琴の音を「故政仕の大臣の御爪音になむ通ひ給へると聞き渡るをまめやかにゆかしくなむ……」（薫）「大方この君は怪しう故大納言の御有様にいとう覚え、爪の音など唯それとこそ覚えつれ」と不思議な

ことと言つて泣くのである。（故致仕大臣は玉鬘の父、故大納言は玉鬘の弟であるから。）これは、故太政大臣にも柏木にも教わつたわけではない源氏の次男の薫が、どうも変だというのである。作者はここに

も薫が柏木の実子である事を意味しているわけで、このような伝奇的ともいえる血の流れによる才能、資質の承継を迄、作者は考えている。

血統的素質に環境による方向づけが加わるというのである。環境は(一)風土的環境、(a)風土的自然——景色、気候 (b)地域環境——文化との関連をもつ風土——。都か、地方か。畿内といっても、京都。洛中、洛外でことなり、洛中、宮廷、大臣の邸、その他公卿の邸宅街と庶民の家がごた／＼と立ち並ぶ場末、「小家がちにむつかしげなる辺の此面彼面あやしう打ちよろほひてむね／＼しからぬ軒の端毎に」夕顔がはひまつわる「むつかしげなる大路の様」という五條、九條……。地方といっても常陸と筑紫はことなる。紫式部は最後に彼女が理想の女性として読者の前に提示した玉鬘を、何故、筑紫で二十才まで育てさせたか。玉鬘は当時的大臣達が理想の女性として推した。「女の御心ばへはこの君をなん本にすべきと大臣達定め聞え給ひけりとか」。一代目の時代に理想の女性であった藤壺は、后妃でありながら姦通の大罪を犯し、不倫の子冷泉帝を、そしらぬ顔で帝位につけたが、出家し、死後、苦患に堕ちた。これでは理想の女性とはいえぬ。二代目の時代になると、つまり、源氏が人生体験を重ね、多くの優れた女性に出あって、より素晴らしい女性を見出した、玉鬘である。玉鬘は、源氏が賞讃するとおり、源氏の慈愛を感謝しながらも源氏のしうねき下心をも、そしらぬ風にかわし、結婚にも、筋目をたてた、と源氏すら感心する聡明な人。「見苦しの君達の世の中を心のままに傲りて官位をば何とも思はず過していますがらふや」と、故太政大臣末亡人の貫禄十分で、当世の軽佻浮薄な貴公子に対して憚るところなく手きびしい批判をする。弟の紅梅右大臣、義弟なみの夕霧左大臣に対

しても、とかく批判の言をはく。まことに珍しく識見をもった人物であった。源氏世界で異性の愛に抜群に恵まれた幸福な女性である——（夫太政大臣は他の女性には一瞥も与えなかったし、上は上皇、六條院から下は凡ゆる男性迄殺し、男女とも物思はせる君であつた）——、明朗豁達、魅力溢れる人柄は、太陽の光り燦々とふりそそぐ南国筑紫の風土、当時世界一流の文化国大唐文化の摂取口であつた、文化の香たかい筑紫——（それは亡き夫宣孝が自慢げに筑前守在任中の話として、さぞ紫式部の憧れをそそる例の調子で語りきかせていたものであろう。枕草子の逸話、御嶽詣に淨衣姿の詣人の中に、美々しき装束で参詣してアツといわせたり、式部日記にするす、紫式部に不実をなじられて、文に朱をポト／＼とおとしてみせたりする彼のこと、どのように大仰に筑紫が喧伝されたか想像にあまりある）——において成長させ、父に認知されず、母にもおきざりにされ、あの乳母一家に伴われて遠く西国にまで漂泊した辛い身の上、筑紫で、乳母の夫大式を亡くし、大夫監の追手を恐れて筑紫脱出、上京後も陋巷に逼塞し、漸く、初瀬参籠の途次、右近に遭遇、六條院に引きとられる、しかし実父内大臣には容易にあえぬ。養父源氏は思いやり深くいつくしむが、言いよる気配、親のない玉鬘の心労はつきることがない、この境遇が重要なのである。（二）家庭環境　玉鬘の外に、父にほっておかれた側室腹の紫上も母がなく、祖母も十才でなくなる、その環境が人の心の隅々まで思いやる豊かな心の持主として育てあげた。父母に愛されたが、父は出家し、父の犠牲の上に幸運への道をきり拓かれた明石はあくまでも控え目でつつしみ深く、紫上への心配りを忘れぬ聡明な側室となる。遂に、六條院の栄華も果はこの君の為かと思われる程の幸運にいたる。后（将来は国母）の実母、孫が天皇となるのである。宇治大君、中君も母がなく、

世捨人の父親王の手一つで育った。源氏世界の褒められる女性はいずれも皆、両親が揃い、富裕で幸福な権門の家庭に育った人なんぞではない。皆、一苦勞した女性達である。左大臣と皇妹の母北方に育てられた葵上は、思いやりの足りない姫、人物としてはあまり優れた人になれず、夫源氏とは遂にしっくり心のとけあう日がなかった。と作者は設定しているのである。(三)教育、源氏は教育を重視する。男子は、夕霧にオーソドックスな学問をさせようとわざと任官をおくらせて、大学に入れる。切磋琢磨させ、実力ある専門の学者につけて勉学をさせる。これに、右書左琴で管絃、和歌、絵画等々の才も身につけさせる。女子には和歌、物語、音楽、書、聞香、裁縫、染色等々を身につけさせる。これに加うるに社交上のエチケットその他、家庭での教育担当として夕霧・玉鬘には花散里がつけられた。紫上は源氏自身が教育に当った。玉鬘、夕霧がそれ／＼理想的貴婦人、理想的政治家として出現する為に、源氏物語は環境をも重要視しているのである。

次に源氏世界を律するものに因果律がある。紫式部は、源氏物語世界で、誰一人、甘やかさない。光源氏すらも。すぐれた資質、心情、容姿をもって生れた源氏は、3才で母に死別し、父桐壺帝の膝下で育った。母、祖母のない寂しい幼年、少年の日々、彼は亡き母に生き写しという藤壺を慕う気持ちが恋にうつり、遂に不倫を犯してしまった。姦通は大罪である。しかも后妃であり義母である。許される筈はない。まして不倫の子を父の子としておし通したのである。前掲のように、全く同じパターンで、若い妻女三宮と、目をかけていた妻の甥、柏木が不倫を犯し、一子薫を、今度は自分が次男として抱かねばならなくなった。源氏は報いであると自覚したのであるが、作者はここで終らせぬ。色

好源氏は源氏世界で男性はもとより、凡ゆる女性に憧れられる存在であつた。それがコキユになつた、恋の負け犬になつた。しかも、嫉妬する身になり果てた。色好のおしまいである。

実は女三宮、柏木の姦通は、源氏が嫉妬するていのもものではなかつたのである。愚かな皇女女三宮は、うっかり柏木に犯され、うっかり文を源氏に見付けられたが、女三宮は恐ろしさに震えおののくばかりで、終始柏木に微塵も愛情を覚えてはいなかつたのである。凡てにおいて万人に優れていると評価され、自負もする源氏も、いかんせん年齢だけは柏木の若さにはかなわぬ。今迄は、非力な若輩者と見下していたが、不倫を知ると、急に源氏は彼の若さにひけ目を覚えるにいたる。女三宮も柏木の若さに惹かれて心を通わしているかのように源氏は錯覚してしまつた。聡明で人の心の奥までも見抜く源氏、冷静に考えれば、すぐ察しのつく筈のところ、まさかの事態に動揺したのである。人間の悲しい性である。『過ぐる齡にそへて酔泣こそ留め難き業なりけれ、衛門督の心留めて微笑まるゝいと心恥しや。さりととも今暫しならむ。逆様には行かぬ年月よ。老いはえ遁れぬ業なり』とて打見やり給ふに人よりけにまめだち屈して、誠に心地もいと悩ましければ、いみじき事も目もとまらぬ心地する人をしも、さしわきて、空酔をしてかく宣ふ、たはぶれのやうなれど、いとど胸潰れて、杯の廻りくるも頭痛く覚ゆれば、気色ばかりにて紛らはすを、御覧じ咎めて、持たせながら、度々強ひ給へば、はしたなくもて煩ふ様……心地掻き乱りて堪へがたければ、まだ事もはてぬに罷で給ひぬるまゝにいといたく惑ひてやがていたく煩ひ給ふ……』と、皮肉をいって、柏木をより潰し、到頭、病づかせて死にいたらしめる。女三宮にもネチ／＼と厭味をいう。『いたり少く唯人の聞えなす方にのみ寄

るべかめる御心には唯おろかに浅きとのみ思し、又今はこよなくさだすぎにたる有様も侮らはしく目馴れてのみ見なし給ふらむに口惜しくうれたく覚ゆるを……」「いかにうたての翁やとむづかしくうるさき御心添ふらむ……」などと。宮の出家後も、「甲斐な的事や。思ししる方もあらむものを」とやんわり皮肉り、あからさまに、「誰が世にか種はまきしと人とはぐいかゞ岩根の松は答へむ」と詰問の歌をよみかけて宮を「ひれ伏」させるしうねさである。

不幸な事に、この源氏への報いである筈の第二の姦通事件は、思わぬ方向にも傷を与える事となる。重病の床にある紫上に付き添う源氏は、北方の不倫という初めての屈辱に悩む。『我身ながらもさばかりの人に心わけ給ふべくは覚えぬをと、いと心づきなけれど、又気色に出すべき事にもあらずなど思し乱るゝ様のしるければ、女君、消えのこりたるいとほしみに渡り給ひて人やりならず心苦しう思ひやり聞え給ふにや』と、源氏の思ひ悩む様子をみて、紫上もまた錯覚してしまう。これまた人間の悲しい性である。心やさしい紫上はこういう。『心地は宜くなりにて侍るを、かの宮の悩ましげにおはすらむに、疾く渡り給ひにしこそいとほしけれ』この時、源氏が卒直に女三宮の不倫を告げて、その憤りの悩みだと、長年つれそう最愛の紫上に訴えれば、紫上はホッとしたのである。少くとも、ライヴァル女三宮を案じての源氏のうかぬ顔ではなかった、とわかれば、紫上は優しくいたわり慰め、力づけたにに相違なく、源氏は苦しみからぬけ出せたのである——源氏も客観的に事態を把握し、そうか、と推測する事も出来た——が、源氏のプライドが紫上に対してさへ、体裁をつくろい、嘘をついてしまう。こともあろうに、『さかし。例ならず見え給ひしかど、異なる心地にもおはせねば自ら

のどかに思ひてなむ。^(a)内裏よりは度々御使あり。今日も御文ありつか。かの院のやんどなく聞えつけ給へれば、上もかく思したるなるべし。少しおろかになどあらむは此方彼方思さむ事のいとほしきや」と呻き給へば「内裏の聞召さむよりは自ら懇めしと思ひ聞え給はむこそは心苦しからめ……」
「こゝには暫し心安しくて侍らむ。先ず渡り給ひて、人の御心も慰みなむ程にを」と。紫上は六條院へ源氏が戻る事をすすめる、いちらしさ。源氏は紫上に、言つてはいけな言葉を口にした。^(a)発言が、どんなに孤立無援の紫上を悲しませるものに源氏は氣付かぬ。今上と上皇の後櫓をもつ女三宮に六條院春の殿の北方の坐を奪われ、対の御方に格下げになった紫上は、今は病んで、自らのぞんで六條院を出て二條院で病床に臥している。事実を告げていけば、紫上は、源氏の眞の味方は自分一人と確信する事が出来、女三宮降嫁以来、源氏と紫上との間に生じていた溝は一挙に埋まるところであった。惜しい事に、色好源氏の誇りが、コキユになつたとは言わせなかつた。この他意のないごまかしの故に頻死の紫上を絶望の淵につきおとす事になる。紫上は源氏に出家——（夫としての源氏拒否）——を懇願する。それは源氏が最も愛してほしいと願っている女性から見放された、という事であるが、源氏は氣付かぬ。紫上は失意のまま病勢悪化し、氣絶し、受戒の後死去。はじめて源氏は二人の北方に背かれ果てた現実には呆然となる。色好源氏の終焉である。それは即、源氏の生命の終焉を導く。源氏は紫上の死後、女三宮降嫁による苦悩に思ひいたる。

色好源氏にとどめをさしたのは、柏木と女三宮の姦通、薫出生であつた。源氏の根深い愛執の怨念は、柏木を死に、女三宮を出家に逐いやつたが、それにとどまらぬ。不倫の子薫に迄向うのである、

ここに第三の姦通事件を紫式部は設定する。

加害者は源氏の孫匂宮。源氏には好色きさの性と真実なる心とが同居していた。そのまめ心を除き色好の性のみを純粹培養したのが匂宮で、源氏の真実なる心を一層高度にかつ深めるのが薫である。表向き源氏の次男として六條院春の殿において、北方女三宮腹に誕生、成長した薫が、源氏怨念の的となり、悲恋に奔弄されるのが宇治十帖の主テーマである。

皇女の出で六條院の正妻の母が、23才の若さで出家し、父六條院は容易に抱こうとしなかった。どうも異様である。何か自分の出生に秘密がありはしないか、しらぬのは自分一人で、他に知っている者があるのではないか、薫は成長するにつれ疑問が深まり、世の貴公子達のように浮かれ歩く気にもなれぬ。官途に関心ももてず、宇治の山荘に俗聖と噂される八宮の許に法を問いに掛ける。そこではからずも見初めた大君。八宮臨終に姫君を託されたが、大君の心情を大切に思う薫には無理な振舞は出来ない。薫に好意はもちながらも年上であり、後見のない身を思う大君は、自分が後見役に廻り、妹と結婚してほしいと言う。薫は中君に執心の匂を手引して二人を結婚させ、大君に迫るが大君は靡こうとしない。品行不良の匂宮は母中宮に禁足令をしかれ、新婚の宇治へ容易に通えなくなる。大君は、さては噂どおりの色好の宮か。大事な妹を不幸にしまった。女王は容易に結婚してはならぬと堅く戒めて逝かれた父宮の遺言に叛いてしまつて、たった一人の妹の生涯を駄目にするのか、と悩みぬいて病に臥し、遂にみまかる。薫は呆然と愁に沈む。念願通り匂宮は中君を二條院に迎える。そのこまぐとした後見は薫である。亡き人への思慕は遂に生きている妹中君に移る。大君に許さ